大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年六月一日發行第二卷第九號（大正三年五月三十一日印刷納本）

近代思想

六月號

■寄附金募集（廣告）……荒畑寒村 大杉榮（一）
■近代思想とセンヂカリスム（評論）……アンドレ、トリドン 荒畑寒村譯（三）
■人間の漂流（評論）……和氣律次郎（一〇）
■五月廿一日（感想）……土岐哀果（一四）
■噓（小說）……德永保之助（一七）
■新刊（批評）……榮、寒（二〇）
■一挿話（小說）……荒畑寒村（二二）
■大久保より（雜錄）……大杉榮（三一）
■與太の會の記（雜錄）……寒（三三）

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年六月一日發行第二卷第九號（大正三年五月三十一日印刷納本）

近代思想

六月號

寄附金募集（廣告）……荒畑寒村　大杉榮（一）

近代思想とセンヂカリスム（評論）……アンドレ、トリドン　荒畑寒村譯（三）

人間の漂流（評論）……和氣律次郎（一〇）

五月廿一日（感想）……土岐哀果（一四）

嘘（小說）……德永保之助（一七）

新刊（批評）……榮、寒（二〇）

一挿話（小說）……荒畑寒村（二一）

大久保より（雜錄）……大杉榮（三一）

與太の會の記（雜錄）……寒（三三）

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP
95
J2
K47
no.21

▲文學博士 雪嶺三宅雄二郎先生著

(六月十日發行)

世の中

▲發行所 實業之世界社

東京市麹町區有樂町
振替貯金口座三四三三

▲定價一圓八十錢(郵稅十二錢)▲約六百頁菊版洋裝美本箱入

不朽の名

『世の中』とは何ぞ、當代の偉人三宅雪嶺先生の處世訓也。先生の學、先生の識、東西を融化し、古今を渾一して、貫くに一家の識見を以てするは、世の識る所也。國家の治亂興廢より人情風俗の推移に至るまで、政界の情僞、實業界の表裏より市井の流行唄に至るまで、細大と無く收めて以て自家藥籠中のものとなす。頭は雲漢に達して脚は俗塵を踏み議論高遠の處より發して、然も人情に切なり。一技一能或は先生を凌ぐ者あらん。一身之を兼ねて人格を以て貫珠するは、獨り先生を推す。先

人情の哲

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

著出づ！當代の論語現る！

生野處して仕へず、布衣を以て宰相の事を行ひ、富權貴を避けず。其行藏の公明にして、操守の嚴正なる、或は當代の孔子を以て擬するに至る。明治年間言論の權を執つて、永く一代に崇拜せらるゝ事、先生の如きは莫し。然れ共先生濫りに書を作らず。是れ先生の德化を世に布かんとする者の遺憾とする處也。吾が社先生の處世訓の出版を懇請する事三年、先生容易に之を許されざりしが、野依社長の出獄を機として、社運の發展を圖るや、先生特に出版を許諾せらる。『世の中』は即ち是れ正に世の渇望を醫するもの也。

目次

▲意義ある生活▲生活の愉快不愉快▲樂觀悲觀▲不平及び煩悶▲眞面目▲常識▲品行▲元氣▲力▲實行力▲功名心▲獨立心と依頼心▲天眞爛漫▲大人物小人物▲大才小才▲長所短所▲得要領不得要領▲人氣▲機會▲運不運▲創業守成▲成功失敗▲勝敗の分岐點▲奮鬪の意氣込▲猪突猛進▲熟考と即斷▲豪傑風と神經質▲犧牲▲毀譽褒貶▲公平不公平▲逆境順境▲得意失意▲生活難と處世難▲職業の問題▲處世術の上手下手▲正直なる失敗者▲苦勞人▲馬鹿悧口と悧口馬鹿▲らしき善人惡人▲不安の人▲人の奇癖▲怒り▲癇癪玉と堪忍袋▲自惚れ▲有頂天▲おだてに乘る乘らぬ▲身を過る場合▲修養▲讀書法▲頭の下げ方▲其教訓としての失敗▲朋友▲使ふ人と使はるゝ人▲大逆事件の教訓▲代議士と模範的代議士▲實業家の代議士▲實業出身の政治家▲古今の實業家▲實業界の閥▲大藏大臣▲立憲的藏相▲財政家の私財▲官吏の轉業▲官吏風と商人風▲軍人道及び商人道▲英國商人と米國商人▲モルガン式▲士商と商士▲所有慾と使用慾▲善く蓄へ善く散ぜよ▲借金の利害▲福と金▲金の死活▲親の財產▲人格▲人格と金錢▲實業家の立脚地▲實業家の余暇▲富豪の容貌▲天長節と商人▲年齡相當の事▲青年老年の區別▲青年老年の接近▲東北及び東北人▲關東と關西▲日本に必要なる人物▲日本人の留意すべき點▲國家社會より觀たる人物

世間の複雜にして人情の險難なる、聰明者と雖も屢々誤まる。先生眼前の事物に托して、高遠の理を說き、此の世にあつて、知らざるべからず、行はざるべからざる所以の道を明かにす。何人も解すべくして、然も深省を發せしむ。『世の中』一卷、誠に是れ現代の處世經也。現代の論語也。一度本書を讀んで日に三思せば、生涯を誤まる事なきを得べし。

學にして眞に處世の要道也

生活と藝術

六月號

10GO

一册金十八錢　送費一錢

- ■露都日記より……仲田勝之助
- ■新劇論（伊庭孝君に與ふ）……楠山正雄
- ■評論……荒畑寒村
- ■若葉の頃……荒川義英
- ■人の匂ひ……西村陽吉
- ■街上不平……土岐哀果
- ■投稿をしらべて……土岐哀果
- ■新しき詩歌……青年諸氏

阿部次郎氏著

三太郎の日記

■再版出來■

菊半截形布裝函入美本
定價金一圓・送費八錢

川路柳虹氏著

かなたの空

■新刊發賣■

四六判白と黑の裝幀美本
定價八十錢・送費六錢

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地（振替東京五六一四番）　東雲堂書店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

青鞜

革新紀念號

定價 金二十五錢

郵税 金一錢五厘

■面目一新せる六月號■

戀愛の自由　エレン・ケイ

繼しい仲　岩野清

婦人の生活を重んじない社會　らいてう

別れし人に　三ヶ島葭

萬人如何ともあれ　齋賀琴

ソニア・コヴァレフスキイの自傳　野上彌生譯

S先生に　野枝

結婚　西崎花世

「惟然坊」を觀て　哥津

枕草紙現代語譯抄　上野葉

やみのうち　望月れい

歡喜の失踪（オリーブ・シユライネル）　山田わか譯

青鞜社詠草　社員等

「三太郎の日記」を讀んで　らいてう

最近の感想ご　野枝・みどり

讀んだものゝ批評　らいてう等

編輯室より　らいてう・野枝

■編輯者　らいてう・野枝■

發賣所　東京神田表神保町　東京堂

文學者の教科書と稱せらるる世界的名著の完譯出づ！

文學士 高木敏雄先生譯

ゲーテ 伊太利紀行

若きゲーテ（西洋木版）羅馬の廢墟（三色版）チチアノの畫（コロタイプ版）口繪入

◎一七八六年から一七八八月に亙るゲーテの此著は、獨り斯世界的大詩人の生涯に於て一大變轉期を爲してゐる許りでなく、實に獨逸文學に於る一個重要の變轉期を作つてゐる◎伊太利の地を踏んだ他の外國詩人に取つては其旅行は單に個人的意義を有するに過ぎないが、ゲーテに於ては此旅行は極めて廣大な意義を有してゐる◎ゲーテは自ら此旅行中の一年半を稱して彼の生涯中の一大時期と呼んでゐる◎ワイマルに於る不安と煩悩とが動機となつた此旅中の記錄に、南歐の不可思議な藝術國は如何に寫し出されたか、彼が復活の叫びは如何なる風に書き顯はされてゐるか◎彼の人生觀、藝術觀、社會觀、是等のものが其風土記と共に藏せられてゐる此著は、あらゆる文學の愛好者が是非共讀まねばならぬ教科書となつてゐるのである。

全一冊

四六判七百五十頁
總布綴箱入
杉浦非水氏裝釘
最近無比の美本
金壹圓八十錢
小包料金十二錢

大町桂月先生
修訂校註

徒然草
方丈記・東關紀行

金一圓
郵送料金八錢

著者眞筆序文
（西洋木版二度刷）
杉浦非水氏裝
四六判總布綴
箱入頗る美本

模範的理想の註釋書

先生自序の抱負に曰く▼玆に古文學として讀書家の見逃す可らざるものを擇び、今の中等教育を受けたる者の解し得る程度を測りて、註解を施し校合を精にし校正を嚴にし此叢書を發行して竊に以て**古典の定本**と爲さんとす云々と。

詳細解題附

東京市京橋區南鍋町
振替東京八五三番
隆文館
電話新橋一七八〇番
同　一七八一番

213-442254

第二卷 第九號

寄附金募集

來る十月一日僕等二人の創刊する、新雜誌の保證金を得んが爲めに、同志諸君及び同情者諸君の寄附金を仰ぎたい。

此の寄附金の募集期限は、六月一日より九月十五日までとする。

寄附金は其の金額の多少を問はない。

寄附金の御送付は成るべく本社の振替によられたく、又其の寄附金なる事を明記せられたい。

寄附金受領の上は、其の寄附者の氏名及び金額を本誌上に記して、受領證に代へる。

誌上には匿名を希望せられる方も、僕等には、成るべく本名を明かして戴きたい。

猶此の新雜誌の計畫に就いては、本號の『大久保より』を御參照を乞ふ。

荒畑寒村
大杉榮

大正三年六月一日

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想に於るセンヂカリスムの影響

荒畑寒村

一

センヂカリストの運動に通曉して居る International Bulletin の主筆、クリスチアン●コルネリサンは曰く、

『此の數月間(一九一三)、英、米、佛の諸國に於ける革命的大同盟罷工は、多くの人々をして、革命的センヂカリスムに關する著述評論を出さしめた。吾々はセンヂカリスム、その直接行動、手段、總同盟罷工、サボターヂユ等を或は辯護し、或は攻擊せる、多くの新聞雜誌の評論に接した。然もその根源に遡り、同盟罷工、勞働者の鬪爭を觀察し、或は勞働階級の刊行物さへ讀んだ者の尠いのには誠に驚かざるを得ぬ。各國の二三著述家は、革命的勞働運動及び直接行動論の起原を、佛國センヂカリスムの感化に歸し、是が反對論者をして斯くの如き『外國の產物』は、吾が國には必要無しと速斷せしめる。是が機關紙たる『平民の聲(ラ●ボイス●ツ●プーブル)』に因り、或は戰鬪的センヂカリストの著はした小冊子に由て、佛國の運動を研究するに非ずして、センヂカリスムに關する評論家は、此の運動の外部に在り、且つ佛國の勞働組合とは全然沒交涉なる、佛蘭西や伊太利の著者の文言を引照する。數週前、英國の新聞紙に社會黨代議士ラムゼイ●マクドナルドが論文を掲げて、センヂカリスト運動の起原をば、ヂヨルヂ●ソレル、及びその師ベルグソン教授の理論に歸して居た。またシカゴの『萬國社會主義評論(インタナシヨナル●ソシアリスト●レヴイウ)』は、『サボターヂユ及び革命的センヂカリスム』といふ評論を載せて、自ら『新(ネオ)マルクス派』と稱する『新派』、及びソレルに說き及ぼして居る。吾々は是等の評論に含まれて居る一切の出鱈目(ノンセンス)に就て、云ひ張らうとは思はぬ。只だ一の事實を指摘すれば足る。即ち佛、英、米、其他有ゆる國に於ける革命的センヂカリスト運動は、勞働者の運動である。多年の鬪爭の間に得た經驗から、此の運動を創造した者は、實に佛蘭西の革命的戰鬪者であつて、新舊に拘らず如何なる

學派とも、マルクス派とも、新マルクス派とも、或はベルグソン學派とも、全く沒交涉無關係である。英米兩國に在つては、世界の視聽を此運動、及び同盟罷工に先んずる處のものに集めたのは、實に最近の同盟罷工である。哲學の新派に非ずして、困難なる團結の事業と、資本家に仕ふる勞働者の實際上の經驗と、掠奪に反するその日常の爭鬪である。』

二

誠や勞働組合は、彼の新聞雜誌が『センヂカリスムの豫言者』と呼び馴せる諸派の哲學者と、『沒交涉無關係』なるのみならず、また大低の塲合、勞働者は斯かる知識的紳士閥の名をば、全く聞きも知りもしない。經濟的運動に因て從はれた方向に對しては、受働的な觀察者の精神的態度に據らず、只だ運動の內部に在る戰鬪者の活動に據れ。よし前者が此の運動に同情したとしても、彼等はその使ひ馴れた筆を以て、鬪爭に加はつて居る勞働者が書くよりも、一層精確にそれを記述し得るといふに過ぎぬ。故にその記述は、歷史上の證據としては價値ある物だが、然し現代の哲學者の著作を探して、如何に隱微にもせよ、此の運動の主義と一致せる數言を索め、その間に因果關係（理論が原因で、センヂカリスムが結果だといふ）を着けようするのは、全く無効徒爾である。

彼のベルグソンの名に至つては、センヂカリスムと關係ある事、他の思想家よりも更に尠い。センヂカリスムは全く『實行』であつて、ベルグソン說は全く『理論』である。ベルグソン說、事實と科學に對する深き嘲笑を示せるその美しいヂレツタンチズム、その知識の實際的役割を主張せるにも拘はらず、人間的、或は社會的行爲に對する、それ自身の適用の爲に決して準備を作らざる、その叙情的な調子と活潑な想像は、如何なる條件の下にも、センヂカリスムの議論に引き入れらるべきでは無い。

『創造的進化』の著者は是れを除くも、吾々はセンヂカリストの鼓吹運動に因て、深く影響された多くの思想家をば、殊に佛蘭西に於て、容易に見出し得る。彼等が此の運動に影響を與へたとは、如何しても思はれないといふのは、彼等は此の運

動に同情を寄せて居ないからである。然し乍ら、彼等の著述は、腕の倫理と脳の倫理との間の爭ひに因て、特に社會的及び個人的倫理の裡に起つたニイチェの所謂『價値の轉換』の徴候として、或る興味を提するものである。倫理的獨斷説は、ボウラン、シイド・ル・ロワ、或はル・ダンテク等に因て、猛烈に駁撃されて居るが、然も彼等の一人として、曾てセンヂカリスムの目的に同情を表した事は無い。

三

ボウランはその『皮肉の倫理』に於て、『世界』は混沌である、時々、幾分か正當の渦巻が現はるる制度の塵雲である。社會は前者よりも、更に不正當の他の混沌である。人間は今や、彼には調和の出來ない反對の傾向の爲に、彼方此方に引ずり廻される困惑せる生物であると主張する。そして宇宙及び社會と稱する盲目力の、かゝる衝突撞着の間に在ては、吾々の唯一の救ひは皮肉の倫理を採る事に在る。即ち無意味なる終局に對する、如何なる信仰の犧牲にもならざるに在ると云ふ。

アルフォンス・シイドはその『近世可動説』に於て、習俗的論理の死を宣言し、且つ『眞の神なるプロテウス』に歸依を誓つた。マクシム・ル・ロワはその『法律論』の中に、議會制度の滅亡を先觸し、『近世狂崇物』たる立法の頑固なる殘存を悲しんで居る。彼惟へらく、將來に於ては、法律は個人間の契約に因て代へられるだらう。壓制なる國家に因て强ひらるゝ代りに、人間の團体に因て作られた『方向』、『徴候的決議』として見らるゝに至るだらう。

ソレルの著書が、佛蘭西の運動の現在に於ける傾向をば、忠實に反映して居るとは、如何しても云へない。吾々はソレルが、一九〇三年に改良派の意見を表はし、ドレフュス事件に於けるジョーレスの態度を推賞し、正統派社會主義の倫理を註解し、且つ勞働者に忠告して、習俗的な眞理、正義、及び道德の原則を守らしめんとせるを見るのである。彼はジョーレス派から、ゲード派に移つたが、後また寧ろ溫和なセンヂカリストとなつた。ソレルは曾て勞働總同盟の運命に影響を與へなかつたのみならず、またペルティエーの努力が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

漸く果を結び始め、ペルティエーが引き入れた無政府主義分子が、その意見と戰術とを保守的な勞働組合同盟の上に置き始めた時、彼はペルティエーの著はした『勞働取引所の歴史』に序文を書いて居たが、それは彼が全く此の運動に了解を缺いて居る事を示せるものであつた。即ち曰く、『勞働同盟は、世話好きな勞働會議、假へば農業協會(アカデミー)がやるやうな、政府と商議を行ふ平民の學會の一種となるだらう。』

一千九百十年以來、ソレルは或る伊太利のセンヂカリストに書き送つた如く、自分の期待に副はないセンヂカリストの運動に、同情を寄せることさへも公言しない。同年、ソレルはその弟子の一人エドワール・ベルトと等しく、まだ發刊はされないが、王黨の新聞に助力する事を約した。その總同盟罷工、暴力、及び性慾道德に關する理論の短かい研究は、以て如何に深い裂隙が、最も形而上的ならざる哲學者のソレルをば、勞働總同盟中の最も唯物的ならざる經濟學者からさへも、分つて居るかといふ事を示すに足る。

四

ソレルの總同盟罷工の解釋は、甚だ獨創的(オリヂナル)である。彼は將來の社會を少く共倫理的に現代の人間に想見せしめんとする單なる努力に過ぎざる、ベラミーの空想(ユートピア)には辛抱が出來ぬ。かゝる作物の著者は、ニイチエが吾々の精神を形作る最も強い力の一と考へたもの、即ち單なる改良さへも徐々に吾々に與ふるに定つて居る『もつと善い食物、もつと廣い場處、及びもつと衛生的な住家』の影響の下に、人間の精神が改變される事を承認しない。是れソレルが、總同盟罷工の觀念は論ぜらるべきものでは無い。只だ勞働者自身に因ては現實として、そして其の首領に因ては神話として、受け入れらるべきものだと云ふ所以である。

總同盟罷工、社會革命は、有形の目的で無くして、單なる、神話的想像である。然し乍ら、斯くの如き想像は、動力の貯蓄を無窮に保つものである。何となれば、それは鼓吹者(アヂテータア)をして勞働者の努力に、尠くとも群衆にとつては有形である目的を與へて、以て彼等を現社會に反抗し續くるを得せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しむるからである。今日の勞働神話は、神の王國の到來、審判の日等の如き、その信仰が基督教徒を異教徒から區別する基督教神話に酷似して居る。神の王國、及び審判の日は、決して事實とはならなかつたが、然も基督教會は建設せられたのであつた。

故に空想（ユートピア）といふ語は、『建設的』社會主義者の『實際的』計畫を表明するに保留されてある。マルクスが豫言した如き『壞滅（カタストロフ）』が、資本家の創設せる社會をば、突然産業的國家に改變するとは信ぜられぬ冷頭の人物は、空想（ユートピア）を夢みはせぬが、然しその前進を速める爲めに、勞働神話を平民の前に示す事、猶ほ赤い襤褸を闘牛の前に示すが如くである。

ソレルは亦、『暴力論（アポロジイ・ド・ラ・ヴイオレンス）』の中に曰く、『勞働者は資本家を惑亂させねばならぬ。然らざれば、資本家は必ず遲鈍となり、そして其の利益を見失ふに至るだらう。是は竟に勞働者をして、非戰鬪的ならしめ、且つ民主政に因て彼等に投げられた一片のパンを以て、自ら滿足するに至らしむるであらう。』

斯くの如きもの、ソレルには、階級爭鬪の眞目的なのである。

他のセンヂカリストよりも、ソレルは一層多く性慾の倫理を攻究した。然し此問題に關しても、彼は全く習俗的な、そして殆んど正統派基督教徒たる事を示した。急進派の多數は、貞操は多數の扶け無き、妊娠し、或は子を養へる婦人、及び父無し子を押へ付けて置く故に、資本家社會に因て主張される神秘的道德だといふ見解を有せるに反しソレルは『法律上の良心は、貞操に對する敬意が人民の心中深く根ざざる國に在ては、決して高く上るものでは無い。……世の中は、貞操になるに從がつて、一層正しくなつて往くものである。』と書いて居る。又、何かの著書の中で、彼は『ルソーの妻が夫の上に惡影響を及ぼしたといふのは、詐り彼女が、ルソーの好色的想像を鎭むるに足りなかつたからである。』と、吾々に語つて居る。

五

センヂカリストの倫理に關聯して、未だ曾てその名を告げられた事の無い、ソルボーン大學の講

Asia Library
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

師フェリックス●ル●ダンテクは、ソレルを始め、其他の人々よりも、更に科學的な言葉で、センチカリスムの倫理を述べて居る。ソレルは單純にした形而上學を其の基礎としたのであるが、ル●ダンテクは勇敢に、その倫理を生物學の上に建設した。曰く、

『習俗的道德は、義務を以て永遠にして本然のものなりとし、權利を以て單に比較的にして、且つ偶然のものだと主張する。人間の救濟は、その正當の權利を有する事物を要求するよりも、却つてその一切の義務を果すに在る。征服階級が被征服階級に對つて賤しみ、顧みぬやうに敎へた生物學的倫理は、義務に對する權利の屈服を嘉する事は出來ぬ。地上に於ける人類の繁殖は、二つの本能、即ち個人的利己心の先天的本能、及び社會的利己心の後天的本能の間に、爭闘を惹起した。第一の本能は、吾等をして吾々の權利の爲に戰はしめ、第二の本能は幾分僞善的に、吾々をして義務を認めさせる。然らば即ち、權利は自然であり、義務は形而上的である。

何時にもあれ、直接の個人的利益と、個人が間接に社會の繁榮な狀態から抽き出し得る利益との間に、反目が現はるゝ時、精神的習慣から生れた形而上的思想は、吾々の心中で、他の種類の利己心から起れる考慮と相爭ふのである。吾々の衷に名譽の感情を發達させるのは利己心であるが、然し吾々をして、常に名譽に反對して裏切の習慣を行はしめるのも、また利己心である。此の爭闘と二元論との結果は、人間進化の最も強い動力の一たる、僞善の發達である。種族に先天的ならざる性格の遺傳に在ては、習慣は重要な働らきをする。習慣は模倣をばその主な基礎として居り、隨つてその實在を全く信ぜざる者に因てさへも、形而上的思想が敎へられてある事は最も重要なのである。吾々はそうするのが利益だと思へば、躊躇する事無く嘘をつく。然しその嘘をつくのは内々で、且つ大丈夫發見されないといふ時に限る。公けには、吾々は嘘言を非難する事頗ぶる嚴酷で、嘘をつく人間は大に輕蔑する。

近世社會に於ける革命家の役目は、僞善を壞滅して皮肉を以て是に替ふるに在る。皮肉は生物學的眞理を、正直に人間の行爲に當て箝めたものに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

過ぎぬ。然し、若し皮肉が或る時間優勢を占めれば僞善は決して復らざるべく、而してそれは、如何なる社會制度をも辛抱せぬ事であらう。幸にして何人にせよ明日の主人となる者は、昨日の主人に因て求められた同じ形而上的思想、即ち正義と平和とを呼び求むる。若し勝利者が、單に彼等が一層強いからと云つて、その主權を宣言したら、吾々は恐ろしい路に立つのだ。習慣は些しの間はその力を保つて置かれるものである。然し、吾々は社會の存立する原則に對する尊敬の、明らかなる減退を（尠く共、その個人的一員の心中に）見得るのである。そして是は、大なる勃興を防遏せんと努むる者にとつて、甚だ憂ふべき徵候である。……例へば議會は、唯だ一つ、即ち革命を避けるといふ目的を持つて居る。その目的に達する爲には、彼等は個人若くは個人の集團に、その害を蒙らせんとする力と相等しき權利を許容する。

吾々の現在の僞善は、常に高い形而上的な言葉の下に、此の立法的必然を隱す。議會が人民に許すものは、許すのが『至當』だと謂はれるものである。然し事實は、人民は若し許されなかつた時は、暴力に因て奪ひ得るものを許されるに過ぎないのだ。種々なる階級の利益は、相反せるものなるが故に、爲政者は常に如何すれば、或る階級の利益と一致して往けるか、そして一方、その階級が特權を得れば、必ずそれを奪はるゝに定つて居る他階級の反抗を、巧みに招かぬやうに爲し得るかといふ事を確かめばならぬ。多數こそは恐るべき要素であり、また彼等には何事をも讓歩するといふ誘ひがある。然し乍ら、少數が恐るべき物になつた時は、その爪牙を現はす前に、一片の食物を與へなければならぬ。是れが爲政者の行動の唯一の金科玉條なのだ。個人としては、彼は如何なる目的をも有せず、シカとした將來に進歩もせぬ。只だ彼は一寸の間、人民の相呑噬するを止むるに過ぎぬ。

資本家が初めて同盟罷工に當面すれば、その精神的習慣の結果として、自身の爲めに作つた主觀的權利の着眼點から、甚だしく尊嚴を冒瀆されたやうに思ふ。法律はその主要の職分として、財產を保護するものであれば、同盟罷工を普通一般の罪惡と同列に視る。然し乍ら、客觀的權利が明

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

らかに强力となれる時は、主觀的權利は單にそれを作れる精神作用以外に、大したものでは無くなつて了ふ。さすれば、法律もまた改變せられざるを得ぬ。正義といふ如き陳腐な口實の下に、法律は勞働者に對つて、法律の適用者が、同盟罷工を止むの無力なるを發見した瞬間に、罷工すべき權利を許した。吾々が『合法』若くは『既定の政府』といふ言葉を要ふる時き、吾々は、單に形而上的觀念を表はすに過ぎざる此の言葉の崇嚴に依て、自ら印象せらるゝを禁じ得ない。吾々は凡ての既定の政府が、暴力に因て確立せられ、且つ他の暴力的行爲がそれを轉覆する迄は、依然として確立して居るといふ事實を忘れる。そして是を轉覆せんと企てつゝある者等は、その企圖を實行し終り、それに因て、今度は自分達が形而上的の後光を被る迄は、罪人として視らるゝのである。今日の傾向は法律を論議して、若しそれが惡ければ、是を避けんとするに在る。『法律に從ふは萬人の義務なり』といふが如き古い言葉は、その昔し有して居た神聖な意味を失つた。吾々は罰を恐れるから法律に從ふのだ。故に唯一の問題は、『吾々は法律を破るに足るだけの力を有するか、といふ事である。』

六

『人間の權利は、その害を爲す力と相均しい。』といふ、此の論旨は、不思議にも米國のビンセント・セント・ジョンの著書『I.W.W.の戰術』中の言葉、『勞働者は資本家から、力に因て取り、團結の力で守る者の外、如何なる讓歩をも求められない。』といふのに非常に酷似して居る。

若し夫れ、最後に引照するル・ダンテクの評論に至つては、センヂカリストの團体以外に在てすら、私有財産の思想の賴み綱の一たる勳功或は報酬の思想は、根本的に辯難駁擊されて居る事を示すものである。即ち曰く、『功勳といふ如き思想は、平等といふ思想に反せるものである。蓋し、比較的にして且つ一時的なる功勳に對する報酬は永續する不平等を創るからである。今日、曾て或る勇敢な行爲に由て勳章を得た兵士は、卑怯臆病な振舞をする時ですら、矢張りその勳章を胸間に光らせて居る。昔し羅馬人は、戰場の勇士に酬ゆるに木の葉の冠を以てした。是れは二日と經たぬ中に凋んで了ふ者であるが、それにも拘はらず、それが酬いた行爲よりは、更に永く續いたのである。』

私有財産及び不平等に對する、此理論の適用は見易いものである。『財産は盜賊なり』との見地から、吾々は更に一層科學的な、即ち財産は不合理な物である、そして一時的の永續せる償ひであるといふ見地に進化したのである。(André Tridonより)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人間の漂流（上）

—ジャック・ロンドンに據る—

和氣律次郎

文明史は刀劍を手にして食物を求むる漂流の歴史である。人類は他の動物と同じやうに食べ得る物を探しながら地球上到る處を彷徨した。人類に種々な冒險を敢てせしめたものは、ロオマンスでも冒險心でもない、唯飢餓の必要である。

これは太古からさうであつた。何の計畫もなく盲目的に自動的に飢餓の苦痛に責められて、人類は此の地球上を漂流した。この漂流はプレヒユウマンズ時代からあつたに相違ない。恐怖に支配せられ、而かも其恐怖に發達を促進せられつゝ、これ等の我等の祖先は、今日吾々が經驗しつゝあるが如き飢餓の苦に惱まされながら、追ひつ追はれつ、喰ひつ喰はれつ地上を漂流した。

東から西へ、西から東へ、北から南へ、南から北へ、有らゆる方向から有らゆる方向へ漂流した。漂流と漂流とが擦れ違つた事もあれば、衝突して更に新な方面へ轉じた事もある。中央歐羅巴からアリヤン族は亞細亞へ漂流し、中央亞細亞からチユラニアン族は全歐羅巴へ漂流した。亞細亞は有史以前から餓ゑた人間の大波を歐羅巴へ注ぎ、其波はスカンデイナヴイアや、英吉利に迄侵入した。其後更にアツチラや、タメルレエンの群衆が侵入し、今日は支那人や日本人の移民が、亞米利加を脅してゐる。それ以前にも度々漂流したフエニキア人や希臘人は、地中海沿岸に殖民した。羅馬は亞細亞民族の洪水に押されて、北方から漂流して來た獨逸民族の激流に捲き込まれた。アングロ族、サキソン族、ジユウト族等は諸々を漂流した後、英吉利へ流れ込み、英吉利人は更に此漂流を全世界に及ぼした。餓ゑてガツガツしてゐる、より强い種族に追ひ捲くられて、エスキモ人種は荒涼たる極地へ漂流し、ピグミイ人種は沼氣のある亞弗利加の叢林へ漂流した。今日でも、民族の漂流は續いてゐる。支那人は比律賓やマレイ半島へ、歐羅巴人は合衆國へ、亞米利加人はマニトバやノオスウエストへ漂流してゐる。

これ等の漂流中、最も驚くべきものは『南洋漂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

流』であつた。他の漂流には曾てなかつた程、盲目的に且氣紛れに、民族の漂流が續々と洋中の島々へ行はれた。亞細亞の本土からはアリアン族の漂流が流れ込んで、セイロン、ジアヴア、スマトラに文明を建設した。勿論今は、其の紀念物が殘つてゐるのみである。彼等は全く滅亡して了つたが、その滅亡以前に茫々たる南大平洋を横ぎつて、遙かイイスタア、アイランドまでも彼等の漂流の證據を印してゐるのである。この漂流に於て、彼等は彼等以前に既に漂流した民族と出會ひ、更に彼等アリヤン族は今日吾々がポリネシアン、及びメラネシアンと稱してゐる、他の族の代る所となつた。

人類は早くから死を發見した。彼の進化が許すや否や、彼は牙や爪よりも更に巧妙な殺人法を工夫した。人類は火を發見し、宗教を製造した以前に於て、既に殺人法の工夫に一身を捧げた。今日に至る迄彼の最大創造的精力と最大技術とは、より巧に、より多く人間を殺す武器を作る事に消費されてゐるのである。昔から今日に至るまで、人間の時間は殺人の爲めに費された。太古時代には恐怖に戰き、叢林に潛み、洞穴に隱れてゐた動物は、有らゆる地上の動物に君臨するやうになつた。何んとなれば彼は有らゆる動物中、最も恐るべき殺戮者に發達したからである。彼は非常に多數が群集してゐるのを見た。彼は塲所を作る爲に殺した。塲所を作るに從つて、群集は更に增加した。彼は絕えず塲所を作る爲に殺す事を續けた。殖民者が土地を開墾して穀物を植ゑんとする際に、先づ雜草や叢林を除くやうに、人間は自ら植ゑんが爲に有らゆる樣式の生命を除去すべく强制せられた。そこで彼は刀劍を携へて、彼が渴望してゐる地上の空間を占領してゐる數大の生命の間に、彼の道を斬り開いた。而して彼は絕えず戰鬪の範圍を擴大して行つた。遂に今日では單に人間や動物の最も有力な殺戮者たるのみならずして、彼はマイクロオオガニズムスの世界の、無數の眼に見えざる群集の恐ろしい生命にまで戰鬪を挑んでゐる。

劍によつて興つたものが、劍によつて亡んだのは事實である。然しその凡てが亡ばなかつたのみか、劍によつて興つた者は、それによつて亡んだ者よりも多數である。然らずんば、今日斯く無數

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の群集が、世界を走り廻つてる筈がない。又劍によつて興らなかつた者は、曾て興らなかつたのだといふ事を忘れてはいけない。劍によらずして興つた例は曾てない。此見地から云ふと、最優等者が戰爭に出て、其次の優等者が殘つて次位の優等者を繁殖するが故に、人間の種族は戰爭によつて退化すると說いてゐるドクトル・ジョルダンの戰爭論には多少の誤謬がある。若し彼の主張する如く、吾々は吾々が產んだ最優等者を戰爭に送り、殘つてゐる者のみで繁殖を續けてゐたとすると、一千萬年も前の人間はどの位立派で神のやうであつたか、殆んど想像も附かない事になる。而も事實は之れに反してゐる。吾々は動物園へ行て猿を入れた檻の前に立つ時、吾々の祖先の面影を窺ふ事が出來る。殺す事によつて絕えず殺す事によつて、地球を一大屠殺場とする事によつて、これらの猿に似た動物が吾々に發達したのである。

月日が經つに從つて人間は增加し、彼等は場所を求めて更に遠く漂流した。彼等は人間の他の漂流と出會つて、莫大な殺人が行はれた。弱者やデカダンは劍の下に倒れた。虛弱な國民は勿論、地味の肥えた谷間や、豊饒な河口の三角洲に榮えてゐた國民は、砂漠や山間の辛苦に育てられて劍に有力な强健な人間の漂流に掃蕩せられた。數千萬の人間が有史以前に於て滅された。ドレエペルの云ふ所によると、二十年間のゴシック戰爭に於て、伊太利は千五百萬の人々を失つた。『又戰爭、飢饉、疫病の爲に、ジアスチニアン帝の代に一億の人類が生命を失つた。』獨逸は三十年戰爭に六百萬の住民を失つた。

又人間は劍以外の他の方法で亡ぼされた。洪水、飢饉、疫病及び殺人は人口を減少せしむる場合を作る有力な原動力である。チヤアレス・ウッドラッフ氏が其著『種族の膨脹論』中に記してゐる如く千八百八十六年に黃河の堤防が決潰した時には、七百萬の人民が溺死した。千八百四十八年に於ける愛蘭土の凶作は百萬の死亡者を出した。千八百九十六七年、及び千八百九十九年から翌年にかけての印度の飢饉は、二千百萬の人口を減じた。長髮賊の叛亂及び回敎徒の亂は、千八百七十七八年の飢饉と共に、數千萬の支那人を滅した。印度に於ては、千九百三年から千九百七年までの疫病死

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

亡數の一年間の平均數は、百萬から二百萬を算してゐる。ウッドラッフ氏の説に從へば、現に合衆國に住んで居る人間中千萬人は、結核病で死ぬべき運命を有してゐるといふ。又合衆國では、一年に平均一萬人の人が殺害せられてゐる。支那のみでも、年々三百萬乃至六百萬の赤兒が殺されてゐる。全世界に於ける赤兒殺しの數は、實に驚くべき多數である。又亞弗利加では、現に睡眠病の爲めに數百萬の人間が死んでゐる。

戰爭よりも更に甚だしく生命を破壞するものは産業である。有らゆる文明國に於ては無數の人間が、病の巣窟で不德の製造所で、漫性的飢饉地である貧民窟や勞働區に群集してゐる。そこでは、近代の戰爭で軍隊が人を殺す以上に、早く且多數に人間が死亡してゐる。倫敦のイイスト・エンドの貧民窟の幼兒死亡率は、ウエスト・エンドの中流階級の三倍である。合衆國に於ては最近十四年間に全常備軍よりも多數の鑛夫が殺され負傷した。合衆國勞働局の報告によれば、千九百八年不慮の災禍に斃れた勞働者は三萬乃至三萬五千に達し、負傷者は二十萬に及んだ。即ち勞働者に取つて最も安全な場所は軍隊である。若し軍隊が出征して、キユバか南部亞弗利加で戰爭に從事するとしても國元にゐる勞働者よりも生き得る機會が多いのである。

而かもこの恐るべき死亡表や、過去現在に於ける無數の殺人にも拘らず、現に地球上には十億七千五百萬以上の人間が棲息してゐる。こゝに於てか、吾々は人間は非常に多産で且丈夫であるとの結論に達せざるを得ない。斯く多數の人間が地上に生活してゐた事はない。過去に於ては世界の人口が少なかつた、未來は增加せざるを得ない。これと同時に吾々の前には、屢々嘲笑に葬むられた古い幽靈が、執拗にも再びその亂髮の頭を擡げて來るのである。即ちマルサスの教義である。人間の食物生産の增加能力と、世界の處女大陸への殖民とは、一致してこの數代の間、マルサスの數學的記述、『人口の法則』を噓らしく思はせた。然し彼の教義の本質的意義は嚴存してゐて、決して異議を挾む事を許さない。人口は食物生産を壓迫する。而して如何に食物生産が增加しても、人口は必ずそれを追ひ越すのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

五月二十一日

哀果生

今日もまた雨だ。雨と風とは實にいやだ。雨がふると、からだがじめじめして、四肢五體がゆるんだやうになる。風がふくと、腦ががさがさして、何にもしないのに疲れきつてしまふ。はやく青空が見たい。青空を高くあふぐと、はじめて生きてゐるやうな氣がする。

書卓（テーブル）に凭ると、近ごろぢき脊なかが一面に熱くなる。そして痒いやうに痛む。これはこの二三日の新しい感覺だ。とにかく普通の健康でない。醫師が診察したら、普通どころでなく、よほどの大病なのかも知れない。醫學上の知識の乏しいために、わるいなと思ふぐらゐですんでゐるのかも知れない。しかし、よほどわるくなつてゐても、それはむりでないと思ふ。どうもおれは餘計に働き過ぎるやうだ。いや、おればかりではない。みんな、おれの周圍のものは餘計に働き過ぎてゐる。このまゝなら、もつと怠けてゐていゝのだ。しかし、怠けてゐていゝと思ひながら、やはり遂あくせくと働く、そして働き過ぎるのだ。ほんとうにあはれでならない。

をとゝひ貰つて來たハロルド、ホヰツトモア、ウヰリアムスといふ人の、『露西亞人の露西亞』のフロンチスピイスに、リエピンのかいたウオルガ河の船曳きの畫がある。おれは近ごろこれほど壓へられるやうな、腹のたつやうな、泣きたいやうなこれではたまらんと思ふやうなすてきな畫を見たことがない。これがウオルガ河の岸だ。其岸に、十人ばかりの露西亞の勞働者が、めいめい胸部に幅のひろい紐をかけて、水上の船をさも重さうに曳いてゐる。その勞働者のからだ、顏・ぶかぶかな、汚れくさつた服をきて、髮の毛をもやもやに生やしたのもある、顏に布をまきつけたのもある、ひよこりとした帽をかぶつてゐるのもある、しかめた顏が鬚の中へ埋まつたのもある、ポと息をついたやうにして、袖で眼の汗を拭いてゐるのもある、ぐつと前へのめつて、だらりと兩手をくんで、そして下から上を見あげた瞳のひかり、その中には

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しらが頭の老人が一人ゐる、年もなにもわからないやうなのがゐる、地上に何か藁のやうなものが落ちてゐる、これらの勞働者のしどろもどろな足どりの間から見えるどんよりと濁つたらしいウォルガ河の水——ほんとうにおれはこんな畫を近ごろ見たことがない。實にすてきな畫だ。ぢつと見てゐるとおれの頸すぢをだれかぐつと攫んで、この畫の中へおれの頭を押し込みでもするやうな畫だ。何だかおれもこの勞働者の中の一人になつて、胸部に紐をかけて、うんすうんすと曳いてゐるやうな氣になる。いや、ほんとうにさうなのだ、おれはこんな弱いからだで、この都會生活のなかでこの重いいのちをえつちらおつちらと曳いてゐるのだ。この勞働者の中に、一人、帽をかぶつてゐるのが唇のあひだにマドロス、パイプをくはへてぬつと立つて、向ふ岸を見てゐるが、おれが、もしこんなことをしてゐたら、おれはおれのからだをあべこべに曳つぱられてしまふ。大河の逆流に曳き返へされてしまふ。おれはたつたおれ一人で曳いてゐるのだからな。

これでふと思ひだしたのは、いつか讀んだステツフエン、グラアムの『チエンヂング、ラシア』の中の重荷といふ記事だ。それはある朝、この著者が森の邊へ來かゝると、そこに、三十四匹ばかりの馬が一臺の觸輪車に軛で繋がれて、その車上に一個の非常に大きな汽罐(ボイラア)と、六本ばかりの鋼鐵板の載せられたのを挽いてゐる。汽罐(ボイラア)は長さが三十呎ばかりもあつて、眞赤な色に塗られ、そこに獨逸文字で、白く鑄造所の名が書いてある。田舍路の泥濘に深くきざまれた轍のあとは、この重い車を呑み込んで、どうしても動かない。斧をもつて來て、それをテコにして動かさうとしたが、ガタリともしない。馬もすつかり疲れて、曳きださうともしない。やがて白シャツを着た露西亞人の醉つぱらひの監督は、トロイカを下りて、一同に何かいつ附けた、その聲の中に『村の火事』といふのが聞えた。どうするかと見てゐると、その男は一同に轍の邊(あたり)をすつかり調べさせた後、いきなり氣違ひのやうに喚きはじめた、そして鞭で馬の背をうちすゑる、『そらあ、そらあ、火事だ、火事だ、火事だ！』むやみやたらに叫ぶ『そらあ、大變だ！ 大變だ、火事だ！』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

三十何匹の馬はまるで氣の違つたやうになつて耳をそばだてゝ、口から泡をふいてのめつて、身をもだえて、また立ちなほる、馭者達は情用捨もなく鞭を揮つて打ちすゑる、一時にみんな死んだやうにへたばつてしまつたが、馭者達はなほもさかんにけし立てる、遂にあの大きな赤い鐵の柱は動きはじめて、轍は眼まひでもしたやうに一轉一轉した。

かくして、この重荷は、やつとこの白シャツの男のすてきな發明でその惡路をつゞけて行つた。馬はみな喘いでゐる、この哀れな動物は、むかうの村が今烈しく燃えつゝあると信じてゐるに違ひない。

『だが一体いま何時だらう？』と、著者の連れは訊いた。

『太陽はまだ昇らない。』

おれはこの馬をたゞ『哀れな動物』と思つて見てはゐられない。おれの車も泥濘にはまり込んで、二進も三進も動かないのだ。いくら力をいれてもすこしも動かない。その時、『火事だ、火事だ』といふ叫喚が耳もとに落ちてくる、おれはもう車を曳いてゐることを忘れて、おれ自身のために驅けりだすのだ。どこ迄ゆけばいゝのか。それも知らない。たゞ際限のない道だ。そして、さうだ、ほんとうにまだ太陽は昇らないのだ！

脊なかゞますます熱い、すこし眠らう。雨もいつまでも霽れやうとしない。

■實業之世界紀念號

雜誌『實業之世界』社長野依秀一君が出獄し、同時に楚囚裡一年有半の薀蓄を傾倒して、大に活動する紀念號とあつて、六月一日發行の同誌は、本文二百頁の尨然たる大册、雪白色の表紙に鮮やかな血紅色で、野依君獄中の番號たる一八九四が大きな型の數字で現はされた華やかさが、先づ看る者の眼を驚ろかす。更に野依君自身が、下獄記だの、獄夢記だの、獄中回顧錄だのと、都合四篇も誌上に記事を掲げて居るのを見た者は、恐らく誰しもその元氣と精力とに感服せざるは無からう。三井の贈賄事件には必ず何とか痛烈な記事が現はれるだらうと思つて居たが、案の定、大塚主幹を始め九博士三教授の『三井の贈賄と會社道德問題』がある。就中福田德三博士の議論の如きは、その短かい點とその鋭い點とで、正しく三井の咽喉へ村正の短刀を擬するもの。希くば更に一歩を進めて、グサと一つお見舞申して貰ひたい。

本誌の廣告にもあるが、近々同社から三宅博士の『世の中』といふ書が出る。由來處世訓などいふものは、二十世紀の今日雪を積んだり螢を集めて讀書しろ式の事が多いが、博士の書は此點に於て大に選を異にするものがあるだらう。何れ出版の上、忌憚無く批評して見たいと樂しんでゐる。（特價金廿五錢麹町區有樂町一の四實業之世界社）

嘘

徳永保之助

桶屋の若夫婦のカソリック信者のことを、近所で知らぬものは一人も無い。かみさんの方は度々怠るけれど、亭主は毎日曜決してお詣りをかゝしたことが無い。そしてその度毎に、告解(懺悔)をして聖体を受ける。恐らく日曜日と云ふものは必らずそうしなければならぬもの とでも思つてるか、それともそれを一人ぎめの而も動かせぬ規則としてやつてるのかも知れない。彼は、併し、それほど多く罪を犯すだらうか、又犯したゞらうか、それを無論誰も知るものは無い。

實際、日曜日毎に告解をして、聖体をうけるとは、彼にとつて必要であつた。彼はそれを怠ると、何となく氣がすまなかつた。日曜らしい、穏かな、澄み透つた心持になれなかつた。餘ほど以前のこと、タツタ一度、已むを得ないことのために、それを怠つたことがあつた。そしてその日は不愉快だと云つて、一日碌にめしも食はず、仕事もせず、やたらにかみさんに當りちらした。

今日も彼は、五時の彌撒に間に合ふやうに、朝早く起きた。そして顔もそこそこに洗つて、火鉢の前でたばこを二三服立てつゞけにふかし、昨夜の冷たい茶を一杯のむと、そのまゝ戸をガタ〳〵云はせて出て行つた。

新榮町から居留地の教會へはヂキだつた。天にはがつかりした蒼白い昨夜の月がのこつて、獨りさびしさうにしてゐた。人の息をまじへない、生々した朝風が、湖の上をわたつて來たやうに涼しかつた。時々月島へわたる青服の職工に出逢つた。

居留地へ入ると、うす青い明方の光の中に、街燈が疲れたやうに、まだぼんやりついてゐた。鋪き石したやうな平坦な道は、しつとりと露に黒くぬれて、沁み入るやうな冷たい心持がした。彼は何となく輕い心持になつた。彼は教會の前まで、往來の石ころを草履で蹴つて歩いた。

彼は教會の前で、今朝告解しやうとすることを考へた。彼は自分の心の中を探りはじめた。併し之れと云つて何も惡い事が見付からなかつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『俺は今週何か罪を犯したらうか、何か告解することがあつたやうだが、……俺は何を告解しやうとするのだらう?』

彼はひとりごちた。

『イヤ今かうやつて思ひ出さうとするから思ひ出せないんだ。何時もの通り告解場へ入つて心を落ちつければ惡い事は自然に心に浮んで來る。』

彼はよく告解場へ入つてから、いろいろな奮い、新しい自分の罪を、神父の前に自ら算へた。

彼は急いで會堂へ入つた。會堂の内は一体にまだうす暗く、中央の祭壇の金色の裝飾が、大蠟燭の赤い光にきらきら輝いて、早詣りの信者が四五人、あちこちにゐるばかり。朝の薄明りが窓の色硝子を通して、紫や紅や青や黃色の光を、白い聖像や、圓柱から床の上に投げてゐる。彼は廊下に皿に盛られてあるルヽドの靈水をつけて、祭壇に向ひ、跪いて十字架を切ると、靜かに歩み進んで、一番最後の椅子についた。やがて朝のいのりを終へて、彼は胸に手を組み合せ、首を俛れて、そろ〳〵と告解場の方へ歩いて行つた。

告解場は會堂を入るとすぐ右にあつて入口には黑いカーテンを垂れてある。狹い箱のやうな内部は、夜のやうに暗くしめつぽかつた。丁度跪いて肱をつく位の臺の上にのせた祈禱書の文字がチャッと讀める。今、一方の小窓で、中年の女の懺悔をきヽとつて、贖罪を命じた神父は、クルリと此方に向き直ると、隔ての一尺四方位な細い合ひ格子のはまつた小窓をあけて、鬚髯の生えた大きな赤ら顔を見せた。亭主はしづかに告解前の祈を終つた。彼はしばらく默つてゐた。彼は心にあわてヽ、いろ〳〵な想像をして、自分の犯した罪を求めた。併し何も思ひ浮ばない。彼は何か言はうとして、只だ口をモグ〳〵動かしただけだ。彼は大きな唾をグッとのみ込んだ。彼はモウだまつてゐられなくなつた。彼は口から出まかせの、ありもせぬことを言ひはじめた。

『神父様!』

彼はやつと叫んだ。

『私は先日友達と一緒に吉原へ參りました、女は私の久しく來なかつたのを恨んでましたが、それでも大變喜びました、私も……併し私は後で、悔悟しました、私は定つた妻のある身です、私は

わるいことをしました、私は決してもう參りません、神樣に誓ひまする。』

『それは大層惡いことをしました、魔鬼のまどはしにかゝつたのです、そう云ふ時は、一生懸命神樣にたよつて誘惑に打かたねばなりません。』

『私は人と口論しました、私は人をあざむきました、私はまた、妻が他の若い男と嬉しさうに話してるのを見まして、もしやと思ひまして嫉妬を起しました。』

彼はフトゆんべ見た二ッの夢を思ひだした。そしてそれを事實として申し立てた。

『私は昨日近所の仔猫が胸の上へのつかつて來ますので、其奴をヒドい目に逢はせました、それから先日私は道端で二十錢銀貨を一ッ拾ひました、そしてそれを自分のものにして了ひました。』

『フム、そう云ふ時はそれを巡査にとゞけるか、又は教會の慈善箱に入れるかしなければいけません、……モウそれだけですか。』

『ハイ』

神父は彼にこの次の日曜まで聖体をうけることを禁じた上、贖罪としてコンタツ(珠數（ロザリオ）)を日に三べんづゝ一週間繰ることを命じた。

彼は聖体を受けられなかつたので何となくつまらないそして澄まぬ心持で、急いで家へかへつて來た。そして未だ戸も外してないのを見ると、彼はプン〳〵し出した。

『何んだ未だ戸もあけやがらないで何してるんだ。』亭主は戸をガタピシさせながら、入つて行つた。この時一人の男があわてゝ裏口から出て行つた。かみさんは暗い中にまだ蚊帳を吊つたまゝ寢てゐた。

『オイいつまでねてるんだ、好い加減に起きてめしをたかねえか、俺が腹をすかして歸つて來るナアわかつてるだらう。』

『日曜にや少し寢坊したッていゝぢやないか、お前さん大好きな聖体を戴いて來たんだらう、少しや我慢おしよ。』

『そんな事云ふと罰があたらア、小さな紙きれみたいなものがめしの代りになるか、文句言はねえで早く起きろよ。』

『そいぢや之れからはごはんをたべて行つてもらひませう、めしを食つたか食はないか誰も腹の

中まで檢査する譯ぢやないんだから。』

『あきれ返つたアマだナア、それでも信者か。』

亭主は睨み付けるやうにして言つた。

『今起きますよ、なんなら、ゆんべのごはんを一ぜん搔込んで、ごはんの炊けるまで凌いだらどうです。』

かみさんは斯う云ひながら、尙ほ起きやうともしなかつた。亭主は思ひ切つたやうな調子で、

『それはそうとさつき裏口から出て行つたのは誰だい？』

『誰でもありやしない、裏向ふのをばさんさ、それがどうしたの？ この人は今朝少し變だョ。』

『そんならそいで可いんだョ、只一寸聞た丈だ。』

『イヤな人だよ。イヤに不審さうに聞くんだもの。』

亭主はモウ何も言はずに、只だ無暗にたばこを吸つて、力一杯火鉢のふちを叩いたが、やがて立上ると、そのまゝ默つて半分吊つた狹い蚊帳の中へ入つて行つた。

外は夏の朝の太陽が、破裂しさうにかがやき出した。（をはり）

新刊紹介

涙より闘ひへ（生田虎藏著）

大ぶあちこちの批評家を驚かした本だ。尤も其の驚きの新聞雜誌の紙面に現はれたのはまだ見ないが、よく方々で此本のうはさを聞く。何者だらう。これが先づ皆んなの口から出る聲だ。聞いた事のない名の、しかも地方にゐる人らしい。僕は、何によりも先づ、其の飜譯のうまいのに驚いた。ショゥの『新聞切拔』あの英國の時事問題を捕へて皮肉に仕組んだと云ふ一幕物の喜劇が、本當にショゥの筆らしい垢拔した筆致で譯されてゐる。其外に評論がある、隨筆がある、小說がある、所謂新体詩がある。詩や小說はいかにも才筆らしく見えるが、しかし感心したのは一つもない。評論は可なりの進步思想を持つた人を想像させる。經濟的見地から日本の歷史を論じて、遂に資本勞働の調和に及んだ、卷頭の『大正第二の維新』の如きは、結論に至つて甚だアッケない感じもするが、しかし最も異彩のある文章だ。猶隨筆めいた『新婚の姪を送るの序』は、著者の社會政策論を思ひ出させる、甚だ老獪な論旨の、面白いものだ（榮）（金一圓、山口縣大田曙光社）

戀娘（田村俊子作）

いろ〳〵な階級、いろ〳〵な職業、いろ〳〵な性情の、若い女を主題とした短篇小說集で、何れも至極アッサリと書き流してある。作者の序の一節に曰く、『境遇に因てそれぞれ異つた處に未來の運命の花を開かうとする是等の若い娘達の夢見勝な華やかな感情で彩られた、少さな生活を描いたものを輯めました。』と、宜しくお目止めらるゝを要する（寒）（金九十錢本鄉區本鄉四丁目牧民社）

一挿話

荒畑寒村

あの時の僕等の事件に、こういふ一場の挿話（エピソード）があるんだ。

僕等は豫審判事から接見禁止の命を受けたので、面會、書信、一切許されない。隨つて、讀みたい書籍の差入や、必要な用事の依頼を、獄外の同志に託する事も出來ない始末で、まあ既決の囚人さへも享受し得らるゝ極めて些細の自由までも全く奪はれてしまつたといふ譯だ。で、運動や入浴なども勿論一人なら、豫審廷へ呼び出される際なども、普通ならば、七八人は入れらるべき裁判所の假監に、たつた一人入れて置かれる。何の事は無い、傳染病患者が隔離されて居るやうな案配なのだ。

或る日朝早く豫審廷に呼び出された。檻車を降りて假監に移されると、看守が手錠を除つて呉れる。假監は三層樓の裁判所構内の地下室で、厚い石壁で區劃して、幾つにも仕切られて居る。外から入つて來ると、一寸は足を進められない程まつ暗な、石疊みの長い廊下を隔てゝ、一方は白い黴でも生えて居そうな、冷たい石の壁が、先は暗い闇の中に沒してしまふまで續き、片側には太い鐵の棒を箝めた、假監の厚い扉が並んで居る。監内は凡そ疊八疊敷位の廣さで、突き當りの石壁に、高く切つてある窓からは、構内の庭に生えて居る竹籔の頭が覗かれる。窓に近づいて見上げると、裁判所の赤煉瓦の建物の三層から二層にかけて、夏の朝日が斜めに切つだやうな光を投じて、下まで降した茶色の日除が、時折涼しい風にゆらめいて居る。

正午近くなつて、日比谷や永田町邊りの杜や樹立に蟬の聲が油を煎るやうに聞え出し、日光が更に二層から最下層まで及んで、假監の天井に窓グラスの光を反射するやうになると、冷々する石壁と石床との裡に在りながら、ヂリヂリと油汗がニヂみ出す。監房の隅に置いてある便器が、嘔吐を催ほさせるやうな惡臭を放つ。妙なものでこんな時に何を一番痛切に感ずるかと云へば、只だもう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

一刻も早く監獄へ歸りたいのだ。然し、朝の中は涼しいからまだまだ樂だが、僕は前の晩暑苦しいのと南京蟲に責められるのとで、かなり遲くまで寢付かれなかつたものだから、涼しい假監内に在ると、睡くなつて、睡くなつて終ひには長い木の腰掛に掛けて、後の壁に頭を凭せた儘、覺えず寢入つてしまつた。

と、誰かしら僕の名を呼ぶものがある。

『おい、村田……村田……。』

僕は眠つたとも、覺めて居たとも解らない、灰の層の中をまさぐり進むやうな重苦しさの底からフト浮び上つたやうに眼を見開いた。何しろ一味徒黨十四人も居る處へ、假監の數は五六房しか無いのだから、日に四人づゝ豫審へ呼び出すとして半分は他の罪囚を收容するから、如何しても一人か二人は廊下に置かれなければならぬ。その日は恰ど、宮本が廊下に腰掛を据ゑて置かれて居た。僕が扉の鐵棒の處に近寄ると、彼は正面を向いた儘、眼鏡の底から横目で此方をヂロリと眺めて、低い憚かるやうな聲で囁やいた。

『おい、おい、いま看守が彼方を向いてるからナ。おい、佐々木が不敬罪にやられたのを知つてるか。シッ、シッ、來た、看守が來たョ。』

佐々木が不敬罪！、僕は初めて耳にした。勿論共犯同志の交通は絶對に禁ぜられて居る事とて、聞き知る術も無かつたには相違ないが、然し、不敬罪とは思ひがけない事であつた。……あの事件の當日、僕等が捕へられて、K――警察署の留置所に入れられても、佐々木の姿ばかりは見えぬ。

『佐々木は如何したらう、逃げたかナ。』

『さあ……、巧く逃げ了せられゝばいゝが。』

江戸時代の所謂『御牢内』を偲ばせるやうな、厚い角格子を箝めた、一つ室に閉ぢ込められた僕と小坂とは、密かにこう囁やき交した。夜になると雨が降り出した。六月末の事だつたが手も屆かぬまで高く切つてある石の窓閾（ウヰンドウ・シル）に當つては、燈火も無い房内に散り濺ぐ雨の飛沫が、肌に泌み入るやうな寒さだつた。と、急に入口の方が騷がしくなつて、巡査等の罵り騷ぐ聲が、板敷の廊下を馳せ交ふ音と入り亂れた。廊下の天井に微かに點つて居るランプの火光に透して見ると、佐々木が刑事らしい男に引つ立てられて來た。全身濡れ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

鼠のやうになつて、兩手は背にくゝし上げられ、黑つぽい單衣の片袖はチギれて了つて居る。

『如何した、佐々木。何處まで往つたんだ。』

僕等は各々の房から、口々に叫び問うた。然し彼は平生のやうにまるで無感覺で、巡査が繩を解いて留置所の扉を開けると、默つて自ら中へ這入つた。その房には、宮本と、出獄後狂死した森山とが居た。Ｋ――警察には一晝夜置かれ、翌る晩雨の中を檻車で警視廳に護送された。翌朝今度は檢事局に送られ、再び警視廳に歸つて、更に未決監に差し送られた。Ｋ――區からＹ――區に入らうとする、見附邊りの新綠は滴るばかりで、僕等の分乘した二臺の檻車からは『あゝ革命は近づけり』の句を以て起る『革命の歌』が、轍の響きを消して續いた。溶銅のやうに紅く輝やく雲の、家の上に高く突き立つて居る下を步む人々は、皆驚愕の眼に僕等の檻車を見送つた。……その以後、佐々木と僕とは樓上と階下とに分たれて、ついぞ顏を合す機會も無かつたのだ。

佐々木の不敬罪！といふことを聞くと同時に、僕の念頭に浮んだのは、後に僕等が『靑鬼』と綽名した、Ｋ――と呼ぶ豫審判事であつた。『あなた方は』などと云つて居るかと思ふと、急に嵩にかゝつて『手前達』はなどと脅すやうに云ふ。野卑で陰險で、昔しの『岡つ引』にフロックコートを着せたやうな男で始終傍らの書記を意地惡くシッ叱つて居る。後でよく話しあつた事だが、僕等の一人として、此の『靑鬼』と喧嘩しない者は無かつた。『彼奴の仕業だ！』佐々木が憤慨して何か云つたのを捉まへて、陷いれたに違ひ無い。』僕は咄嗟の間に、そう思ひ定めた。

『佐々木はまだ、あのＫ――の前で何か云つたんじや無いか。向うに乘せられるやうなことを……。』

『そうじや無いんだヨ。Ｋ――署の留置所でネ、壁へ〇〇〇〇〇〇〇と書いたのが發覺したんだ。一審は傍聽禁止で三年九ケ月やられたそうだ。それも未丁年だといふので、一等を減じてなのだ。尤も、いま控訴中だがネ。』

『へえ……、留置所の壁へ書いたとすれば一日二日にしろあの事件よりは後だ。だのに、その豫審も濟まない中に、一審が片付いて了ふなんて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

隨分早いんだなア。で、ほんとに佐々木はやつたのかい。』

『いゝや、佐々木は絶對に否認して居る。』

『然し、君と森山は同じ房に居たんだから、果して佐々木がやつたかやらないか、知つて居そうなもんじやないか。』

『佐々木は全くやらないのだ。やつたのは森山なのだ。だのに君、佐々木はまるで僕がしたやうに云つてるんだ。酷いじや無いか。』

看守が靴音高くやつて來て、各監の扉を開け始めた。そして豫審廷や、公判廷へ呼び出される者を引き出して、暗い廊下へ並ばした。手錠を掛けられ編み笠を被らされて、一列に並んだ未決囚の襟に附けた番號の白布のみが浮き出て居る。

一度暗い疑惑の渦中に投げ込まれた僕の心は、それから如何しても、靜かにも、明るくもならなかつた。

こうして、僕は初めて佐々木の不敬事件なるものを知つた。そしてやつた當の人間は佐々木では無くて、森山だと略ぼ信じ込んで了つた。然しまだ一點の疑念とする處は、あの房には佐々木と森山と、宮本との三人が居た筈である。それなら、裁判所は何故三人を取調べないのだらう。そして、三人が三人、よし或は自分の卑怯から、或は同志に對する信義から、當の人間を名指さない迄も、三人を對決させればすぐ判然する次第である。が、僕には如何も、森山が爾く卑怯であり、且つ同志に不信だとは思はれない。すると恐らくは、K――署が同志を陷いれる爲の奸策では無からうか……とも思ひ惑つた。けれ共、不幸にして此の疑惑は、一方の大きな事實を覆へすに足りなかつた。何故なれば、宮本は是が當の責任者――僕は此の責任者といふ語を、犯罪者といふ意味に使ふのでは無い。然し乍ら今は對法律の問題で無くて、同志に對する責任問題となつて居るのだ――は、實に森山であると斷言して居るでは無いか。……あゝ、森山！森山！。僕の眼には、土曜會の講演の席上で、彼が車夫の法被姿の儘、火のやうな辯舌に直接行動を叫んだ時の、彼の醜い、然し飽くまで男々しい顔が、烙き付けたやうに殘つて居る。また彼が吾が黨の機關紙上に公けにした、山縣先生に與へて議會政策の迂愚を論じ『先生は議會に吾等はパンに！』と結んだ一文の如きは、吾々の血を沸かしたものである。その森山が、果してこんな羞づべき、卑怯な、不信な振舞に出でたのだらうか。

僕は自ら信じ、自ら打ち消して、獨り狹い監房の中で苦しんだ。僕は先づ事の眞相を多くの同志に問はうと思つた。然し樓上の監區に居る者は、僕と同樣、是に關しては多く知らないに違ひ無い。然し階下の監區に居る同志は佐々木と接近して居るだけに恐らく何かの機會で、多少の事實は知つて居る筈である。殊に佐々木と、森山とには一寸でもいゝから會ひたいと思つたが、同志

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の多くと接觸する機會は固より、現在の境遇は、外部の同志を通じて事實の斷片を得る事さへも出來ない。此の苦しい、徒らに焦立てる心の中に一ヶ月は經た。そして接見禁止解除の命は下つたものゝ、佐々木の事件に就ては、外部の同志から何の知る處も無い。偶々面會に來た同志に訊れても彼等は何の答へをも與へず、只だ絶望的に『駄目だヨ』と云ひ放すのみだつた。僕の疑惑と焦心とは依然として續いて居る間に、吾々の公判期日は既に目の前に迫つた。

若し、公判の模樣を述べるとなれば、それは僕の話そうと思ふ挿話(エピソード)よりも、寧ろ本題の話の方に入つて了ふから、それは玆には省かう。只だ法廷のボックスの中で、僕は竊かに佐々木に囁やいた。

『君、不敬罪でやられたそうだネ。』

佐々木は頷いて見せて、それから低く指を三本示し、更に九本を示し乍ら云つた。

『いま、大審院へ上告中なんだ。』

『大審院?、だつてつい此の間、控訴院へ控訴中だつたと聞いたが。』

『控訴院じや棄却サ。然し傍聽禁止の儘で宣告した者だから辯護士が違例だつて上告したんだ。』

『フーム、だが君じや無いつていふぢやないか、森山だつて。』

佐々木は低い聲で、然し斷乎として答へた。

『僕じや無い、然し森山でも無い、宮本がやつたんだ。』

僕は再び迷ひ、疑はざるを得なくなつた。裁判所の假監で、初めて僕に此の事を知らせたばかりで無く、佐々木が自分を責任者だと云つて居ると、頻りに憤慨して居た宮本が、それなら眞の責任者なのだらうか。若しそうだとすれば、彼は獨り佐々木に責任を負はしめたばかりで無く、更に全然無關係な森山までも、その渦中に投じようとして居るのだ。然し、宮本がそんな兇惡な人間とは、尠くとも僕には信ぜられない。寧ろ僕には宮本は可なり勇氣のある、信じ得べき同志と思はれて居た。然しこう聞いて見ると、彼は眞に卑怯者だつたのだらうか。同志と一團になつて、叛逆の聲を揚げる時のみ先頭に立つの勇氣があるが、只だ獨り責任の重荷を負はねばならぬ時は、自若として當面する事が出來ないのではあるまいか。責任に對する恐怖!彼は自ら羞ぢ、自ら苦しみながら、只だ責任に對する盲目な恐怖と回避とから不知不識

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

卑怯者の役割を勤めて居るのではあるまいか。

やがて、判檢事の出廷と同時に公判は開始された。その間、僕の心は全く此の疑惑昏迷から救はれて傍聽席に居る多くの同志に會つた嬉しさと、主義の爲に法廷に立つたといふ一種の誇り——こういふ輕佻浮薄な感は、恥づべきではあらうが、僕にはあつたのだ——と、裁判官の問ふが儘成るべく正確に當時の出來事を想ひ起して答へようとする事にのみ、向けられた。公判は夕刻終りを告げた。僕等は多くの同志と互みに默禮を交しながら、再び暗い地下層の假監に降つて往つた。その時、僕はソッと背後の森山に問ふた。

『森山、君はK——署の壁に書いてあつたといふ例の文句は、誰が書いたか知らないか。』

『知らない。然し、佐々木じや無い事だけは、僕が保證する。』

此の言葉は假監から更に檻車に移されて、未決監に送り返される間、僕の心を占め續けて居た。森山にせよ、宮本にせよ、佐々木と房を同じくして居た者が皆佐々木の寃罪を證據立てゝ居る。そうすると兎に角佐々木が責任者で無い事だけは、是で充分明白になつた譯だ。問題は只だ、それなら森山と宮本と、二者の孰れかが眞の責任者であらねばならぬといふ事である。そして宮本は森山だと云ひ、佐々木は宮本だといふ。獨り森山のみは誰れだか知らぬとは云つて居るが、佐々木でも自分でも無いと云　ば、宮本より外には無くなる筈である。あゝ、それを如何したら確かめる事が出來やう。又よし知り得たとしても如何して此の事實を公けにする事が出來よう。もと／＼、あの留置所に居た者は、同志では三人きりである。その内で嫌疑を受けた一人が事實を否認すれば、勢ひ他の二人を調べる筈である。そうすれば、誰れが果して眞の責任者であるか直ちに解らなければならないのだ。それが、そんな簡單な事實が、探偵と、巡査と、裁判官との大軍隊を有して居る政府に解らない。……僕は端無く、曾て面會に來た一同志が、此の事件に關して絶望的に云ひ放つた『駄目だョ』の一語を想ひ浮べた。あゝ駄目だ！駄目だ！。

事件の當日から恰ど二ケ月目、秋風立ち初めた八月下旬に、僕

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

等は初めて囚衣に着更へて、東京からC——監獄に轉送された。R——の停車場で檻車を降りて、書籍の大きな包みを腰掛の下に置き、鳥追が被るやうな編笠を脱ぎ手錠も片々外して貰つて、武州の平原を車窓から眺めて居ると、一行七人——二人は無罪となり、二人は執行猶豫となり、三人は控訴乃至上告中だつた——何れも一年以上の刑を負つて居る身を忘れて、實に呑氣にお喋りを續けた。遠く西の方に、彎曲した線を描いて、秋の日に銀鼠色に鈍く光つて居る總州の海が現はれ、停車場の構内には、貨物を積んだ儘、線路の上に切離されて居る貨車の上に、幾人かの兵士が寢そべつて居た。『もう、そろ〳〵C——に近づいて來たナ。』僕は默つて見交す同志の顏と眼とに、アリアリとその色を讀んだ。

車臺の一隅には、海野と宮本が並んで坐つて居た。些し隔てゝ僕と小坂が居た。小坂は海野に、低聲で、

『おい、宮本にあれを聞かうじや無いか。』

と幾度か囁やいたが、無駄話は構はずさせて置いても、用件らしい事はすべて看守が禁ずるので、海野は口を切ることが出來ない。僕は『あゝ、例の事だナ。』と感づいたが、矢張り何とも云ひ出せないで居た。列車がC——の町に着いた時は、もう西側の家並の影が、全く往來の日光を消して了つて居る頃だつた。僕等は監獄に着くとすぐ浴場に連れて行かれ、四五十人も入れさうな、三和土の大浴槽——後には一人づゝの分浴だつたが——に入れられた。そして廣い浴場の隅に、大盥二つに湯を汲んで、その周圍を取り卷いて洗ひながら、海野は先づ宮本に對する質問の口を切つた。

『宮本君、佐々木の不敬事件の原因は、君に在るといふ專らの評判だが、君は全く何も知らないかネ。』

『否え、僕は全く知りません。』

『然し、あの房には佐々木と、森山と、君の三人が入つて居たんだらう。そうして、君も森山君も佐々木では無いといふ事は認めて居るんだらう。さすれば、君か森山君か、どつちかだらうが、佐々木は君だと云つて居るんだ。』

『じや、あなたも僕だと云ふんですか。』

『いや、勿論まだ誰とも解つちや居ないのだがネ。』

宮本が憤然として突つかかつて來たのを、海野は輕く受け流して了つた。

すると今まで默つて躰を洗つて居た森山は、靜かに、然し詰るやうに云つた。

『然し君、君は同志諸君に、僕がやつたと云つてるそうじや無いか。』

宮本は暫らく默つて居たが、遂に澁々ながら答へた。

『そりや、その時はそう思つたからサ。』

僕等は眞面目な顏を見合せた。もう誰も一言も云はなかつた。そして默つて起ち上つて、水を浴びて外に出た。

二三日してから、僕は小坂から、小坂、海野、森山の三人連名で、私かに宮本に絶交を云ひ渡したといふ事を聞いた。僕は此時もう、眞の責任者は宮本だとほゞ信じて居たが、然しまだそれでも全然彼をそうとは思ひ込めなかつた。そうだ、同志に責任を負はせて、可なり永い刑期に服させ乍ら、平然として居るといふ事は、一寸想像し兼ろ事である。それだのに彼の樣子を見ると『知つてるだらう、僕は三人から絶交された。』と囁やいたのみで、別に落

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

膽した風も無い。海野は『落膽したり、絶望したりされないで、大きに安心した。』と云つて居たが、一年半の月日を先に扣へて居て、同志に獄中で絶交されながら、猶且つ平然として居るのは、同志に永い刑期を被せる位ゐ屁とも思はぬ程の人間か、或は全く、自己の潔白を信じて居る人間かに違ひ無い。然し其期に及んでも、猶ほ僕は彼が前者の如き不信兇惡な人間だとは信ぜられない。とは云ふものの、浴場に於ける彼の言葉を聞いた今の僕は、彼が眞の責任者だといふ心の奥底の確信は、こんな事では如何しても搖がせない。それだのに、僕は何故まだ迷つてゐるのだらう。何故皆なと一緒に、彼に絶交を申し渡さないのだらう。是れは今まで、僕が佐々木よりも宮本と永く、親しく交つて居たからだらうか。それとも又、僕に不正邪惡を憎むの念が弱いからだらうか。否、否、その何れでも無い――或はその何れでもあるかも知れ無いが、僕の弱い心は、到底今の彼に絶交を云ひ渡す事が出來なかつたのだ。

後に殘つた者の消息は、絶えて知る機會が無かつた。殊に佐々木の上告は、如何な結果になつただらうか。兎に角、何の責任も無い彼が、自己一身の爲めに同志を犧牲にして顧みない者に代つて三年餘の刑期に服するといふ事は、全く無意義な事と云はればならぬ。或る日、僕は特に典獄に乞うて、宮本に自訴を奬めようじや無いかと密かに提議して見たが、彼が到底肯んずまいといふ事、またよし彼が自訴したとしても、その結果は單に犧牲がもう一人增えるに過ぎぬだらうといふので、竟に成立たなかつた。そして僕は何と云つても、此處では到底眞實の事は解らない。他日再び自由となつた時に、一切の眞相が初めて判然するのだ。それ迄は、僕等はまあ當り前に交つて往かうじや無いかといふ事に定めた。

『そうだ、如何に宮本でも、君等にまで絶交されちや堪るまいから。』海野もこう云ふのであつた。

宮本は依然として平氣なものだつた。運動や入浴の際などは、看守部長などに對つて、『お暑うございますなア』とか、『お寒うございますなア』とか、白々しい世辭を使ふ。必要以外彼等と言葉を交へぬ事を、殆んど原則のやうにして居る僕等には、こんな振舞がどんなにか苦笑と、侮蔑との的になつたらう。彼は又、恰ど滿一年目の秋に、今まで他監區に居た佐々木だの、小川だの、それから前の事件で入つて居た十名近くの同志が、僕等の監區に移つて來た時、運動や入浴の際に佐々木と顏を合せると、平然として『如何したい』などゝ云つた。そんな事は、また如何にか僕等の無言の憎惡を買つたらう。然し或る時浴場で一緒になると、彼はソッと問うた。

『大に本を讀んでるだらうナ。』

『ウム、仕事は晝飯から夕飯までダ、朝と晩はまるつきり讀書サ。晝飯後は看守が閑暇だからネ、要愼しないとよく見付かるよ。』

『君等はいゝナ。僕なんか誰からも本の差入が些とも無い。仕方が無いから、國へ賴んで買つて入れて貰つたが、此の一と月の間、一つ本をひつ繰り返し、とつ繰り返し讀んで居る。』

と云つた時は、僕は覺えず胸が一ぱいになつた。

然し早いもので、そんなこんなして居る間に、一年半は夢のやうに過ぎ去つて、僕と宮本とは、二月も末の快晴の朝、C 監獄の門を出でた。僕等は一年半の工賃、僅か一圓某しかの中から、東京迄の切符と餅菓子とを買つて、久しぶりに舊知の鐵路に身を委ねた。龜井戸迄來るともう淺草の凌雲閣の半身が見え、懷かし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

い東京の市街は、早や眼前に擴がり始めた。僕は怠らずに僕等の方を注視して居る二名の刑事を憚り乍ら、

『君、例の佐々木の不敬事件ネ、一體どういふんだい。』

と尋ねた。すると意外にも、彼は快然として答へた。

『あれア君、森山のやつた事サ。海野君や小坂君が僕を絶交したのは、酷いとは思ふがまだ我慢出來る。けれ共、森山が一緒になつて、僕に絶交するに至つちや、實に厚顔無恥だヨ。然し僕は外へ出てから、同志諸君の前で、立派に證しを立てゝ見せろと決心したから、實に口惜しかつたが、ヂツと我慢して居たんだ。君、實際僕は獨りで、男泣きに泣いて居たんだぜ。』

『だつてお可笑いじや無いか、君は初めて僕に此の事件を話した時、責任者は森山だと云つたネ。そして C——監獄の浴場で、森山から詰問された時は、「そう思つたんだ」なんて云つて、「確かに君だ」と云ひ切らなかつたじや無いか。そしてまた今になつて、森山だと云ふのは如何いふんだ。』

『だつて君、皆なが居るのに、森山に氣の毒でそうは云ひ切れないじや無いか。』

挿話（エピソード）は是れで大方終りなのだ。宮本は出獄後二三日すると、故郷の父が急病だからと云つて歸省した儘、沓として何の消息もない。森山はいま考へると獄中で既にその徴候を現はして居たのだが、出獄すると同時に新領土に渡つて、其處で發狂して自殺して了つた。だから、あの事件の實際の責任者は、嚴格には今日と雖も解らないのだ。只だ一つ、最もよく解つて居る事は、組織的權力のインヂャスチスである。佐々木の出獄後、彼から聞き得た處によると、K——署と雖も必ずしも佐々木だといふ確證は無かつたのだが、逃げたり何かして手數をかけやがつたから、やつてやれ位ゐでいい加減に佐々木と定めたらしい。それから裁判所は當人が接見禁止中で辯護士を頼む事も出來ないから、些し延期して呉れるか、或は辯護士に發信を許して呉れと頼むのも肯かず、遮二無二公判を開いたものだから、佐々木は非常に憤慨して裁判官を忌避したそうだ。すると、檢事が彼を呼んで

『君も一個の主義を有する人物だ、何も辯護士位ゐ無くたつて、立派に口がきけやうじや無いか。それに君は未丁年だが、是が愈々他の同志の所爲となつて見給へ、君の數倍重い刑に處せられなきやならん。君だつて眞逆懲役が恐ろしさに、同志を抱き込むやうな眞似はすまい。』と、巧く云ひくるめたのだそうだ。そして一審では即決で三年九ヶ月。控訴院では控訴棄却となつたが、傍聽禁止の儘の判決は異例だといふので、大審院は原判決を破棄し、更に三年九ヶ月の懲役に處したのだ。（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大久保より

榮

■前號の寒村の『大久保より』や、又僕の『知識的手淫』の中にも一寸書いてあつたやうに、寒村と僕とは、僕等の社會的事業としての此の雜誌のあまりの馬鹿々々しさに、もうとても堪へられなくなつた。

■尤もこれは、此の雜誌を創刊する最初から、僕等の豫想してゐた事であつた。半年か、一年かの中には、僕等自身がいやになるか、お上がぶちこはすか、或は又破產するか、いづれ此の三つを出ない事と豫想してゐた。然るに號を重ねるに從つて、財政の方は兎も角も漸く維持し得る程に進み、お上の方も何等の積極的手段に出でず、僕等自身も亦此の無事な手淫的生活を多少娯しむが如き傾向を生じかけて來た。寒村も僕も、二人とも、餘程此の手淫に油がのり過ぎて來た。

■しかし一方に此の手淫的享樂の心が萠すと共に、他方にそれに對する甚しき反感が起つて來た。そして此の反感が最初からの厭氣と結付いて、遂に寒村と僕とは、此の雜誌を廢刊して、僕等の生活の方向轉換をする事にきめた。大ぶ横道へそれた僕等の生活を、多少本道に近い方向へ向け替へる事にきめた。

■最近數年間の僕等の生活は、佐藤と云ふ人が雜誌『エゴ』の五月號に云つてゐるやうに、本當に『社會主義だらうが官僚政治だらうが、只だふんぞりかへつてゐればいゝといふ大無能の狀態』であつた。そして此の只だふんぞりかへつてゐると云ふ事に滿足が出來ないで、兎も角も何か遣つて見ようと云ふ要求が、此の『近代思想』となつて現はれたのであつた。しかし此の雜誌をやつてゐると云ふ事と、只だふんぞりかへつてゐると云ふ事との間には、今になつて考へて見れば、幾干の差もなかつた。最初僕等が此の雜誌の上に懸けてゐた消極的の極めて小なる希望、即ち僕等自身の手淫的滿足と、同志の間の連絡維持とは、多少果たす事が出來た。しかし僕等は、アナルシストとして又はセンヂカリストとして、積極的には何事もしてゐない。要するに矢張り只だふんぞりかへつてゐたのだ。

■手足を縛りつけられてゐたから、仕方なしに只だふんぞりかへつてゐたのだ、とも辯解は出來る。しかし僕等は、此の手足を縛りつけられてゐるのをいゝ事にして、やれば出來る事もしないで、只だふんぞりかへつてゐやしなかつたらうか。ふんぞりかへつてゐると云へば、まだしも聞えはいゝが、其の實只だへこたれてゐたのではあるまいか。

■僕等には今、爲さればならぬそして爲し得べき仕事が、いろ〳〵あるやうに思はれる。そして僕等は、其等の仕事の一つとして、或は其等の仕事の機關として、先づ一勞働雜誌の創刊を企てた。

■周圍の種々なる事情と僕等自身の微力と臆病とは、恐らくば僕等に、大した仕事もさせまいし、又大した雜誌も出させまいとは思ふ。しかし僕等は、少數の自覺せる勞働者の協力によつて、多少の貢献を、社會進化の上に齎らし得る事とは信ずる。

■新雜誌の內容は、今まだ其の詳細を發表する運びに到らない。名は最初『勞働者』ときめてゐたが、其後同じ名の雜誌が出たので、これも今はまだ、それに代るいゝ名を考へ出せない。形は四六二倍の新聞型として、紙數は八頁若しくば十頁の小雜誌にするつもりだ。これで月一回發行は、大ぶ心細い氣もするが、しかし無資力なる僕等

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

には、これ以上の豫定は出來ない。そして出來るだけ印刷部數を多くして、勞働者の間に配付したいと思つてゐる。

■只だ其の創刊に當つて、最も難關とするのは保證金の問題だ。雜誌の性質として必然に時事問題を論じなければならぬ。それには發行所の所によつて千圓か、五百圓か、或は二百五十圓かの保證金を出さなければならぬ。素より僕等には金はない。又貸してくれる人もありさうにない。勢ひ此の金は同志諸君及び同情者諸君の寄附を仰ぐ外に、出道がない。そこで本號の第一頁に、諸君にこれを訴へる次第となつた。出來る事なら、千圓積んで、東京で發行する便宜を得たい。然らざれば、同人の誰れかゞ地方に住まつて、其處で發行する事とする。まだ創刊の時までは四ヶ月餘りある。僕等自身にも、多少の金は、其の間に働き出せようと思ふ。

■寒村と僕とは、初め此の『近代思想』を二卷限りで廢刊したいつもりでゐたが、其後社同人の相談の結果、從來の他の二人の責任者、即ち安成貞雄と安成二郎とが、引續いて發行する事にきまつた。そして從來の寄書家諸君は素より、僕等二人も、殆んど毎號執筆する筈だ。從つて此の雜誌は、安成兄弟の新しき努力に因て、更に其の鮮かな色彩を加へる外は、今までと同じ內容、同じ體裁のまゝで繼續する。

■それで讀者諸君には、引續き此の雜誌の御愛讀を願ふと共に、誌代滯りの諸君には、九月の事務引繼の前までに其の御送付を願ふ。此の滯りの分が全部集まれば、それだけでも新雜誌の創業費が出來る勘定になる。

■前號で僕が少し堺に食つてかゝつたので大ぶ妙な風評が立つてゐるらしい。しかし堺の文にもあつたやうに、二人の間の議論の相違は、既に數年前から明白になつてゐる事で、今更何んの不思議はない。そして僕があんな個人的憤懣を發表したからとてそれで急に二人の友情に變化を來たした譯でもない。尤もあの問題に就いては、まだ二人の間に十分解け合はない點もあるが、あれだけの事でぶち壞されて了ふやうな淺い間柄ではない。一寸口論をすれば直ぐに絕交でもしたものゝやうに思ふのは、思ふ人の間違ひだ。いづれ喧嘩好きの僕等の間なのだもの、ちよつとやそつとの喧嘩は絕えずある事なんだ。少なくとも僕は、喧嘩の出來ないやうな友達は、友達として持ちたくもない。

■賣文社と堺とは麴町區永田町二丁目六十八番地にひつこした。電話はもとの通り新橋二八五七。

■僕は、鎌倉の土地にあきが來たのと、夏になれば家賃が三四倍あがるのと、それに此頃又少し腸をいためて其の治療の都合があるのとで、此の月末に、もとの大久保の家即ち社に歸つて來る。社には今寒村がゐるのだが、寒村は社の隣りのもとの家にかへる。そして其處に入つてゐた安成二郎は、何處か近所にひつこす事となつた。

■六月號の雜誌の發刊が二三日遲れる。寄書家諸君の多くが怠けたのと、安成兄弟が忙がしかつたのと、僕がからだの具合がわるくて何も書けなかつたのとで、漸く今日其の編輯を終つた始末だ。

■安成貞雄は本月から實業之世界社に入つた。寒村も來月から其處の社員になる。安成二郎は兄キが流産さした雜誌『大正』の復活を試みてゐる。

—五月二十七日—

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『與太の會』の記

寒

■『へちまの花』に、毎號『文壇與太話』——尤もあの種は皆僕が出してやるのだが——を書いて居る與太樓主人安成貞雄と、餘り與太らしく無い（賞めたるに非ず）土岐哀果が發起して、去る十六日の夜、銀座のカフエ・ヨーロッパの二階で、『與太の會』と稱するものを開いた。

■馬場、堺、土岐、佐藤、安成兄弟、和氣、大杉、僕。それに奇觀だつたのは、野依實業之世界社長が、貞雄と一緒にやつて來て、飯を喰つて了ふと、『おい安成、往かう、往かう』と引つ張つて往つて了つた事だ。獨り放つて置くと何處まで怠けるか知れぬ貞雄のズボラの程も、推し測られて感服した。

■相變らず氣焰萬丈、痛罵、惡謔、皮肉、駄洒落、息も吐けぬ程續出連發の体だつたが、奈何せん、貞雄は早く去るし、久津見老、伊庭孝の二大與太は來ないし、どうもいつも程には油が乘らなかつた。

■然し、時々友人知己が集まつて、飯でも食ひ乍ら馬鹿話に夜を更すのは、無意味だが却々面白い。

■寄贈雜誌■

創造　自畫像　第三帝國　生活と藝術
一隅　讀書世界　女學雜誌　へちまの花
エゴ　帝國文學　新公論　實業之世界
水甕　新日本　馬上大學　人生と表現
靑鞜　新佛教　眞人道　ダイヤモンド
新潮　水郷　新思潮　ナショナル
民聲　新眞婦人　番紅花　早稻田文學
假面　現代詩文　東亞藝術　內外教育評論
鄉土　婦人評論　英語青年　東京魁新聞
犠牲　文章世界　公友新報　鑛業及鑛夫
風景　東京評論　村落通信　日本婦女新聞
塔　ローマジ　コスモス　アマチュア
獨立評論　支那と日本　日本エスペラント
名古屋經濟雜誌

■五月號目次■

知識的手淫（告白）……………大杉榮
正氣の狂人（評論）……………大杉榮
蜂と蜂との對話（對話）……………荒畑寒村
障子を隔てゝ（對話）……………荒川義英
胡麻鹽頭（雜錄）……………貝塚澁六
喧嘩（小說）……………德永保之助
子供の間（小說）……………荒畑寒村
アークバッドの仕事（小說）…佐藤綠葉

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年五月三十一日印刷納本
大正三年六月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

賣文社

▲今回組織を變更し事務所を移轉す
但し業務取扱上には何等の變更なし
▲文章一切の代作添削▲反譯物一切▲編輯物一切▲各種原稿製作▲校正寫字タイプライタ▲廣告文案▲印刷代辨▲營業案内呈上

責任者 白柳秀湖 堺利彦

へちまの花

●六月號要目

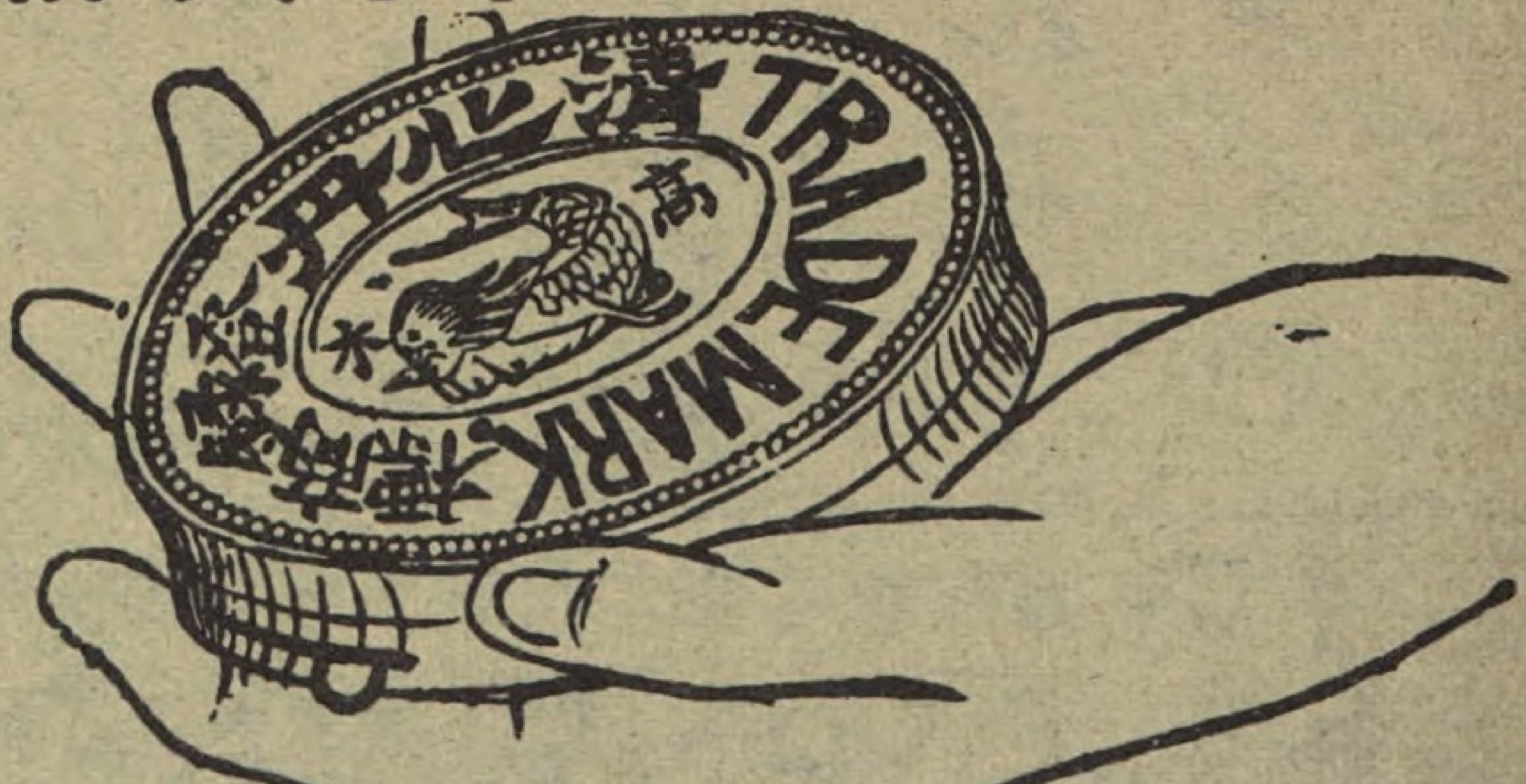
▲N君へ(英文及其譯)……高島素之
▲猫の運命……堺利彦
▲肖像(附一口評)……ヤルー村君
▲般若の面(歌)……いみち子
▲女の見た男……久津見蕨村
▲賣文業者より……白柳秀湖
▲廣野にて……橋浦時雄
▲提灯行列……
▲金銀瑠璃綾錦……
▲賣文社より……

●一年分前金三十錢

東京麹町區永田町二丁目六十八番地 **賣文社** 電話新橋二八五七 振替東京二四六二六

人若し薬を需めんとせば須く選擇を要す

清心丹の三大特色は
一、効能の確實
二、品質の善良
三、價格の低廉



主治効能
心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、過酒過食、悪心嘔吐、溜飲宿食、中暑中寒、下痢痢疾、舟車不快、略痰咳嗽、咽喉不調、歯痛口臭

定價
壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢罐入 十五錢罐入
拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舗 東京市日本橋區元大坂町八番地 高木與兵衛

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第二卷
第六號

エゴ

六月一日發行
定價二十五錢

第六月號

目次

母親の心配（五幕物）　武者小路實篤
雜感　千家元麿
惡しき夢（一幕物）　佐藤惣之助
神の悩み（感想）　千家鐵麿
返事（感想）　土屋小介
地獄界（詩）　佐藤惣之助
六等雜感　同人

附録
ミケル・アンゼロ（ローマン・ローラン）　長與善郎譯

挿繪
サチールの首　ミケルアンヂエロ
男の裸　同
光と陰の創造　同
グロデスク　同

發行兼編輯所　東京市牛込區新小川町三丁目三十一番地　エゴ社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自畫像

六月號

■表紙繪（ゆきを）

エゴの哲學（ジェームス）　北落師門

密航（小説）　久保寒三

懸百合（ロセッテイ）　ゆきを

初ひ子（詩）　菊池香一郎

無花果の熟する頃（小説）　木村幹

燈火のもとにて（感想）　木内錠子

二階（小説）　宮下桂子

憂鬱病（ヱールレーヌ）　牧村宇多吉

破船（モオパッサン）　牧夫

■六月一日發行（定價廿五錢）

發行所　東京府下西大久保七十八番地菊池方　自畫像社

發賣所　東京市神田區南神保町十六番地（振替口座東京一九三四四番）　尚文堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

假面

第三卷第六號　六月號

特價三十錢　郵税金二錢

□ゴルドン・クレイグ舞臺意匠五葉（挿畫）
□或る新しき劇場へ（評論クレイグ）……伊東六郎
□紙上戀情（詩）……日夏耿之介
□死の勝利（戯曲ソログーブ）……松永信
□黎明（小説）……山川亮
□桑の葉かげ（歌）……石井直三郎
□大團圓（戯曲）……丘草太郎
□「かなたの空」を讀む（評論）……西條八十
□春の新劇壇合評　□クレイグの舞臺意匠

假面社編

近代評傳叢書

第一篇　ストリンドベルヒ　加能作次郎

第二篇　ドストエフスキイ　瀬戸義直

本月中旬發行　袖珍麗美本

定價金五十錢　郵税金六錢

發行所　東京市外西大久保百三十一　假面社

發賣元　東京神田錦町一丁目十九　中興館　振替東京一二五番

故山本一藏氏遺著
金子筑水先生序
深澤白人氏編輯

飼山遺稿

△菊判上製美裝本全一冊
△故人肖像筆蹟寫眞挿入
△定價金壹圓
△郵稅金八錢

内容
若き自殺者の日記
相互扶助論（クロポトキン原著）
書簡、諸家の感想

金子筑水先生序文の一節

早稻田大學の文科在學中此の あはれな故人はおほかた多數の人と交りを避けてひたすら淋しい隱れた生活を追て進んだ。彼は何故然か孤獨の生活を選まざるを得なかつたか。彼は何故然か一身を高く標置して 世に背かざるを 得なかつたか。そも／＼ 亦彼はむざ／＼ 蒼の花を蹶散らさゞるを得なかつたか。（中略） 故人の此の舊稿は眼識あるものには明かに故人の內生活の秘密を語るもの隨つて 人生の 少なくとも一面の深秘を暗示するドキユメントであらう。此の稿本の尊さは主として此の 點に存する。 そしてまた 自分は此の點から此の稿本を世の眼識ある人々 に推薦する。

荒畑寒村氏譯

既刊

ショウ警句集

四六判洋裝美本全一冊
定價金五十五錢郵稅金四錢

ショウが作物の辛辣銳利なる皮肉、諷刺は收めて本書に在り。之を譬ふるにショウの作物は一個の食物にして、而して本書はその滋養分のみを壓搾したるエッキスなり。故に本書一卷は優にショウの著作全體に匹敵すると云ふも過言には非ざるべし。附錄として安成貞雄氏譯『G・B・Sの人物』及ショウの演說『家婦所得稅論』を添へたり。敢て近代人の座右に一本を薦む。

ラムスウス氏作
佐藤綠葉先生譯

最新刊

人間屠殺所

四六判新型美本全一冊
定價金五十錢郵稅金六錢

題名既に破天荒!!而して其內容に至つては原著の發行後三ヶ月內に八ヶ國の歐州語に飜譯され、獨逸皇帝をして周章狼狽、國內に於ける發賣を禁止せしむるに至る。體を小說に藉ると雖も實は多數の人命を機械の犧牲とし、血を鐵丸に散らしめ、肉を爆藥に碎かしむる近世戰爭の酸鼻と殘酷とに對する空前の一大批判にして、事實の凄慘、落想の警奇、心理解剖の精緻、一讀又再讀、卷を掩ふ能はざらしむ。

發行所 東京市神田區南神保町 振替東京二四八五九 泰平館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想 第二卷第九號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年五月三十一日印刷納本（大正三年六月一日發行）

六月號 金十錢

粉製・煉製・水製・子供用

ライオン歯磨(はみがき)

東京・本舖 小林富次郎・大阪

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN